奈良･平安時代における東総の集落と郡郷

糸　川　道　行

はじめに

本稿で対象とする地域は、平安時代中期の事典である『和名類聚抄』（以下、『和名抄』とする）に記載された迦瑳郡・海上郡・香取郡である。これら下総国の東部に位置する奈良・平安時代の三郡は、現代も存続し、あるいは近年まで存続した匝瑳郡・海上郡・香取郡とほぼ重なる地域である[1)]。匝瑳郡・海上郡は両郡合わせて海匝といわれることがあり、地理的に密接した地域である。また、香取郡を加えて香取海匝とよばれることがあり、同様な様相がうかがえる。

『和名抄』には、迦瑳郡が18郷、海上郡が16郷、香取郡が６郷記載されている。迦瑳郡と海上郡は大郡、香取郡は下郡であるが、香取郡の場合、墨書土器などの研究により、『和名抄』には記載されていない山幡郷の存在が明らかとなり、『和名抄』が成立する時点までに、海上郡とのあいだで再編があったとみられている（平野1992・1994、原田1993）。

『和名抄』に記載されている迦瑳郡・海上郡・香取郡の郷名については、その多くが現在の地名等に遺存しており、本稿では遺存する地名から比定地をみていく。なお、一部に墨書土器などの考古学的資料を加える。比定地については、主として『下総国の戸籍』（山路ほか2014）と千葉県教育振興財団の『研究紀要25』（今泉ほか2006）および『古代房総の地域社会をさぐる（２）』（天野ほか2012）の３著の研究成果に負っているところが多い。本稿はその３著に加え、必要に応じて他の文献を加えて記述する[2)]。郷の比定については、これまでの研究成果に対して、屋上屋を架すところがあるが、東総地域を巨視的にみたいという思いに、若干の筆者の所見を加えて、あえて稿を起こした。

本稿では、各郷の比定地を検討した後、東総に存在する奈良･平安時代の遺跡がどの郷に所属するかを想定した。各郷の境界付近に存在する遺跡については不明瞭な場合があるが、なるべく一つの郷の帰属に努めた。なお、境界については河川等により、現代と同様に明確な場合があるが、不明瞭な場合もある。

筆者にとって本稿は下総国における奈良・平安時代の集落研究の一環をなすものである。東総の奈良･平安時代の様相は、印播郡や千葉郡などと比べると広域で大規模な発掘調査が少ないため不明な点が多い。しかし、東総はそれらと同様に豊かな歴史遺産をもつ地域である。本稿はそれを理解するための基礎的な論考である。

１　東総および周辺地域における郡郷の比定

第１図に東総地域および一部周辺各郷の遺称地の場所を示した。この図をもとに各郡郷について『和名抄』の記載順に比定地をみていく。記載順について、海上郡以外は元和古活字那波道圓本（以下､元和本とする）による。ただし、海上郡については高山寺本と名古屋市博物館所蔵本（永禄九年書写。以下､名博本とする）による。須賀郷が元和本にはないが、ほかの２本にはあり、記載も同一であることによる。なお、郷名の訓は不明である場合が多いが、推定される一例を示した。

（１）迦瑳郡

①野田（のだ）郷

匝瑳市（旧野栄町）野出（ので）周辺が比定地である。

②長尾（ながお）郷

匝瑳市（旧八日市場市）長谷（ながや）周辺が比定地である。清宮秀堅は匝瑳市長岡周辺を比定地としている（清宮1905）。しかし長岡周辺は千俣郷・山上郷・栗原郷のいずれか、または複数郷の組み合わせをもつ地域と想定され、ここに別の郷を比定するのは、空間的にみて難しい。長谷周辺の方が妥当である。

③辛川（あしかわ）郷

旭市足川（あしかわ）周辺が比定地である。現在では「辛」に「あし」の訓はない。また､清宮秀堅は「辛」を「葦」の誤記としている（清宮1905）が、正否を判断できない。

④千俣（ちまた）郷

匝瑳市（旧八日市場市）大浦字衢（ちまた）周辺が比定地である。なお、大浦付近にある借当川は千俣川、

千又川ともよばれている。

⑤山上（やまべ）郷

匝瑳市（旧八日市場市）八辺（やっぺ）字山ノ郷・山ノ崎・山ノ郷内周辺が比定地である。南房総市や香川県坂出市にある高家神社の「高家」は「タカベ」と読まれているが、「家」を「べ」と読むのは古い呼称と思われる。このことから、千葉郡の山家郷は「やまべ」郷の可能性が高い。「山上」は「山家」と似ていることから、「山上」も「やまべ」と読まれていたとみる。これは大字の八辺と近い音である。

⑥幡間（はま）郷

横芝光町（旧光町）尾垂字浜畑周辺が比定地である。

⑦石室（いわむろ）郷

横芝光町（旧光町）小川台周辺が比定地である。小川台に所在する隆台寺の山号は岩室山であり、この寺院周辺に石室郷の存在を推定できる（山路2014）。また、同じく小川台には中世の岩室砦跡が存在する（道澤2010）。これらの岩室から「石室」については「いわむろ」と読まれていたと推定できる。また、正倉院調庸綾絁布墨書銘文にある「下総国迎瑳郡磐室郷戸主大伴部麻呂戸口大伴マ足輸調庸幷一端　天平十三年十月」から、石室郷は磐室郷であり、同様に「いわむろ」の音であることがわかる。

⑧迎瑳（そうさ）郷

匝瑳市（旧八日市場市）中央部周辺の旧匝瑳村が比定地である。

⑨須加（すか）郷

匝瑳市（旧八日市場市）横須賀周辺が比定地である。元和本や高山寺本では「須」は異体字である「須」であるが、名博本では「須」であり、本稿でも一般的な「須」を使用する。

⑩大田（おおた）郷

旭市ニに所在する太田神社周辺が比定地である。太田の地名は以前、神社から西方の井戸野付近にも存在したことから、大田郷の郷域は、太田神社周辺から西方まで広がるとみる。

⑪日部（くさかべ）郷

旭市（旧干潟町）長部（ながべ）周辺が比定地である。長部そのものが日部と通じるが、長部と香取市（旧山田町）志高との間にある草壁（くさかべ）はより直接的な遺称である（千葉県・名著出版1975、吉田1903）。また、香取市（旧山田町）府馬にも日下部の地名がある。ここは海上郡布万郷であるが、日部郷の遺称である。

⑫玉作（たまつくり）郷

多古町南玉造周辺が比定地である。多古町信濃台遺跡では、「下カ総国玉カ作カ郷」の墨書土器が出土した。ただし、信濃台遺跡の所在地は中村郷の範囲内である。

⑬田部（たべ）郷

香取市（旧栗源町）西田部周辺が比定地である。なお、同じ香取市内の旧山田町にも田部の大字があるが、こちらは海上郡麻続郷内である（後述）。王室ゆかりの名代部のひとつである田部は各地にあり、迎瑳郡とともに海上郡内にも設置された。

⑭珠浦（たまうら）郷

旭市（旧干潟町）鏑木周辺が比定地である（邨岡1902、吉田1903）。鏑木に含まれる「かぶ」は「株」であり、「珠」が転訛して「株」になり、鏑木になったとみる考えにしたがう。鏑木には前代に鏑木古墳群が存在し、御前鬼塚古墳という大古墳が築造されている。このような歴史的な背景からみても鏑木周辺を珠浦郷とすることがふさわしい。なお、『多古町史』では、珠浦を「かぶら」と読んでいる（多古町1985）。

珠浦郷の比定地については異説もある。山路直充氏は『日本書紀』景行天皇四十年是歳条にあるヤマトタケル東征伝説から、珠浦郷を九十九里浜北端（刑部岬南側）の地域とした（山路2014）。すなわち、「海路より葦浦に廻る。横に玉浦を渡りて、蝦夷の境に至る」の記述から、玉浦を九十九里湾として、珠浦郷については「玉浦渡海の象徴的な場所」とみたのである。なお、山路氏は言及していないが、刑部岬近くに玉崎神社が存在することもこの説を補強する材料とみる。

しかし、筆者はこの地にあたる旭市（旧飯岡町）横根は海上郡横根郷に比定されるとみる。横根郷の西方をみてもなお海上郡須賀郷に比定されるとみており、ここに迎瑳郡の郷を比定することは難しい。

玉浦が九十九里湾であることは、「葦浦」が鴨川市吉浦とみられることを根拠とするが、巨視的にみるならば、椿海を玉浦の一部に含めてもよいのではないだろうか。この点は今後の検討課題であるが、日本書紀のヤマトタケル東征伝説の記述が簡略的であることから、可能性はあると考える。名博本では、珠浦郷と原郷を一つにして珠浦原郷としている。珠浦郷が鏑木周辺であるとしても原郷の比定地とはかなり離れているため、この郷名には問題があるが、原郷は内陸の郷であることから、珠浦郷も同様とみる。また、匝瑳市の内陸部に大浦という地名があることも、珠浦郷が内陸に位置することを補強する材料である。

第1図　東総三郡および周辺の郡郷比定と調査された奈良・平安時代の遺跡分布

⑮原（はら）郷

多古町多古字大原内周辺が比定地である。なお、清宮秀堅は郷名が通常二字であること、かつて原方村が存在したことから、本来は原方郷であったと推測している（清宮1905）。しかし、原方は横芝光町（旧光町）にあり、原郷の比定地とはやや離れている。本来の郷域ではないところに地名が移動した可能性はあるが、本稿では、原郷が本来原方郷であるかどうか保留する。なお、郷名の読みを清音としたが、茨城郷で後述する大原から濁音の「ばら」かもしれない。

⑯栗原（くりはら）郷

匝瑳市（旧八日市場市）飯高字三栗毛・金原周辺が比定地である。『稿本　千葉縣史　下巻』によれば、現在の匝瑳市吉田から出土した瓶子に「天平勝宝六年九月十四日下総国栗原郷」と記載されているとのことであるが（千葉県・名著出版1975）、吉田は八辺のすぐ西方に位置しており、山上郷に属する。栗原郷は山上郷とは借当川をはさんで北方に位置する郷であり、両郷は隣接する位置関係にある。上記の文字資料は栗原郷と山上郷の交通関係を反映したものである。

⑰茨城（いばらきまたはうばらき）郷

多古町間倉に「茨城台」の地名がある（多古町1985）。また、多古町千田にも遺称がある。吉田東伍によれば千田には中世に千田庄大原郷があったが、この大原は「おおばら」と読まれており、茨城（うばらき）が転訛したものとしている（吉田1903）。大原の「原」は原郷ともかかわり、茨城郷と原郷は隣接する位置関係にある。栗山川の支流である多古橋川の西方が茨城郷、多古橋川の東方で栗山川にはさまれた地域が原郷である。

芝山町小原子（おばらく）も茨城の遺称である。しかし、小原子周辺は小原子遺跡群庄作遺跡から出土した「上総国…」の墨書土器から上総国に含まれる。武射郡加毛郷に属する土地である。千田は小原子からみて東方であり、茨城郷の西端が下総国と上総国の国境である。栗山川の支流である高谷川に面する台地が上総国側であり、高谷川の東方で、同じく栗山川の支流である多古橋川に開析された台地が下総国側である。本貫の地名が隣接地にある例は、山辺郡武射郷（東金市下武射田周辺）がある。また、下総国府・葛飾郡家の所在郷が豊島郷とみられているが（山路2014）、西方に隣接する武蔵国には豊島郡が存在する。このような事例はほかにも存在する。

⑱中村（なかむら）郷

多古町北中・南中・中村新田周辺が比定地である。また、南中に所在する中村小の校名は中村郷の遺称である。

（2）海上郡

①大倉（おおくら）郷

香取市（旧佐原市）大倉周辺が比定地である。

②城上（きのべ）郷

香取市（旧小見川町）木内（きのうち）周辺が比定地である。「城上」は「きのべ」（千葉県・名著出版1975）や「きのへ」（吉田1903・赤塚1995）、または「きのうえ」（清宮1905）と読まれている。いずれも可能性はあるのだろうが、迦瑳郡山上郷で述べたことと同様に、本稿では「きのべ」郷と読むことにする。なお、『寧楽遺文』（竹内編1962）では城内郷と記述されており、この場合の郷名の訓は「きのうち」とみられる。こちらの方が遺称地の音と同じであり、優先的に考えるべきかもしれない。

③麻続（おみ）郷

香取市（旧山田町）小見・香取市（旧小見川町）小見川周辺が比定地である。また、香取市（旧山田町）田部に所在する日宮神社は古称が麻続大権現であり（篠崎1981）、麻続郷の遺称地のひとつである。

④布万（ふま）郷

香取市（旧山田町）府馬周辺が比定地である。

⑤軽部（かるべ）郷

香取市（旧山田町）府馬字黒部周辺が比定地である。旭市（旧干潟町）桜井平遺跡では、「□（下カ）総国」、「□（郡カ）軽部」と書かれた墨書土器が出土した（蜂屋1998）。桜井平遺跡の所在地周辺は軽部郷ではなく、迦瑳郡日部郷とみるが、日部郷と軽部郷は隣接する郷どうしである。この墨書土器は、軽部郷と日部郷の交通関係を反映したものである。

なお、平凡社の『千葉県の地名』では、東庄町笹川ろの鹿野戸（かのと）（『千葉県の地名』では鹿戸）周辺に比定している（小笠原編1996）。可能性はあるが、黒部の音および桜井平遺跡の墨書土器から府馬字黒部周辺がより有力である。

軽部郷と布万郷は比定地が同じ大字にあることから、近接した位置関係の郷である。その場合、軽部郷は府馬台地東側および黒部川に面する低地を郷域とし、さらにその東方を含む。布万郷は府馬台地西側および栗山川支流の上流である羽根川など（樋口1986）に開析された低地が郷域である。

⑥神代（かじろ）郷

東庄町窪野谷に所在する神代小周辺が比定地である。1889（明治22）年から1995（昭和30）年にかけて、東庄町西部には神代村が存在した。神代はその当時は「じんだい」と呼ばれているが、さかのぼれば訓読みの村名であったかもしれない。神代小からはかなり南方になるが、「神田」の地名もみられる。なお、郷名の読みは「かじろ」（清宮1905・赤塚1995・山路2014）のほか、「かしろ」（吉田1903）、「くましろ」（清宮1905・赤塚1995）などが推定されている。

⑦編玉（あたま）郷

香取市（旧小見川町）阿玉台に所在する編玉（あみたま）神社周辺が比定地である。阿玉という地名自体が編玉に近い（清宮1905･赤塚1995）。

⑧小野（おの）郷

東庄町小南に所在する小野神社周辺が比定地である。なお、香取市（旧佐原市）下小野周辺も比定地の一つであるが、下小野の東方が香取市織幡であり、香取郡山幡郷（後に大槻郷または香取社領か）に比定されることから、下小野周辺は香取郡内とみる。

⑨石田（いしだ）郷

東庄町石出周辺が比定地である。「石」を「いわ」と読むことは先述した石室郷や後述する石井郷にみられるが、地名の石出が「いしで」であることから、本稿では「いしだ」とした。

⑩石井（いわい）郷

旭市（旧海上町）岩井周辺が比定地であり、かつては岩井村が存在した。岩井字安町に所在する岩井安町遺跡では、「石井」の墨書土器が多数出土した（赤塚1995）。

⑪須賀（すか）郷

元和本にはなく、高山寺本および名博本に記載された郷名である。なお、「須」は高山寺本では異体字の「須」であるが、名博本では「須」であり、迺瑳郡の須加郷同様、本稿でも「須」を使用する。旭市西足洗に所在する浦賀神社周辺が比定地である。「須」の異体字の「須」と「浦」は音では似ていないが、漢字の字面はやや似ており、「須」から「浦」への転訛はあるかもしれない。「須賀」という地名は低地を表しているという指摘があり（山路2014）、浦賀神社が九十九里浜に所在することから、地形的には妥当である。

⑫横根（よこね）郷

旭市（旧飯岡町）横根周辺が比定地である。

⑬三前（みさき）郷

銚子市三崎町周辺が比定地である。

⑭三宅（みやけ）郷

銚子市三宅町周辺が比定地である。

⑮舩木（ふなき）郷

銚子市船木町周辺が比定地である。

⑯橘川（たちばな）郷

東庄町今郡に所在する橘小周辺が比定地である。石田郷と隣接する郷である。橘川郷の郷域は現在の黒部川に注ぐ桁沼川により開析された低地及び低地に面する台地とみる。石田郷の郷域は、橘川郷東方の低地及び橘川郷南東方の台地とみる。橘川郷と石田郷の位置関係については北西―南東とみる。なお、本稿では現在まで残る「橘」の地名から、「橘川」を「たちばな」と読むことにする。「橘」に「川」が付けられたのは黒部川水系の影響が強いことによる。

（３）香取郡

香取郡については、『和名抄』に記載された６郷に加えて、かつて存在した、またはその存在を想定する２郷を加えて記述する。

①大槻（おおつき）郷

香取市（旧佐原市）吉原に所在する吉原山王遺跡で「大坏郷」と書かれた墨書土器が出土している（栗田ほか1990）。また、『稿本　千葉縣史　下巻』では、香取市多田に槻ノ池と称する地があることが記されている（千葉県・名著出版1975）。多田は吉原に近く、これらの周辺が比定地である。

②香取（かとり）郷

香取市（旧佐原市）香取周辺が比定地である。

③小川（おがわ）郷

香取市（旧佐原市）上小川周辺が比定地である。なお、旧山田町に小川、旧小見川町に下小川の地名があるが、上小川の北東方向には、前代に大戸古墳群が所在した大戸があることから、大戸を含む上小川周辺を小川郷に比定することが最もふさわしい。

④健田（たけだ）郷

神崎町武田周辺が比定地である。

⑤磯部（いそべ）郷

成田市磯部周辺が比定地である。元和本では磯々郷、高山寺本・名博本では磯郷である。「々」は「マ」すなわち「部」であり、本来は磯部郷とみられる（山路2014）。本稿でも磯部郷と記述する。

⑥訳草（おさかや）郷

成田市長田（ながた）周辺が比定地である。「訳」の「おさ」が「長」になったとみる。

以上、大槻郷から訳草郷までの６郷が『和名抄』にある郷名であるが、香取郡には『和名抄』成立時点では消滅した郷（里）が確実に存在すること、及び存在したと推定する郷（里）があることから、次にそれらを記述する。なお、本稿では６郷に続く番号を振って記述する。

⑦山幡（やまはた）郷

香取市（旧小見川町）増田・上小堀周辺が比定地である。『和名抄』にはない郷名である。正倉院文書の養老五年（721）戸籍に「少幡郷」と釈読されてきた郷があるが、平野功氏・原田亨二氏は香取市（旧小見川町）増田･上小堀地先に所在する古屋敷遺跡（村山･鬼澤1999）から出土した「山幡」の墨書土器を考察し、「少」が「山」の誤記であることを明らかにした（平野1992・1994、原田1993）。なお、「山幡」の墨書は古屋敷遺跡に近い名号戸遺跡（村山・鬼澤1996）・御座ノ内遺跡（奥田ほか1992）からも出土している。

両氏の研究成果により、増田・上小堀周辺が、奈良時代には香取郡山幡郷とよばれた地域であることが判明した。また、山幡郷の郷域は、「幡」の字が共通する虫幡・織幡（ともに旧小見川町）を含む。

⑧真敷（ましき）郷

成田市（旧大栄町）南敷（なじき）周辺が比定地である。『和名抄』にはない郷名である。真敷駅は下総国内の鳥取駅･山方駅･荒海駅とともに、延暦二十五年（805）に廃止された駅家である。駅家廃止以前の真敷駅周辺について、古代の文献史料には真敷郷という記載がみられない。しかし、真敷駅の経営・維持および地理的なバランスから駅戸集落をもつ真敷郷(駅家郷)が存在したと考える。すでに吉田東吾が『大日本地名辞書』で真敷郷と記述しており（吉田1903)、筆者もその考えを踏襲したにすぎない。ただし本稿では、真敷郷が『和名抄』にないため、以下、「真敷」･「真敷郷」と記述する。なお、駅家廃止後の真敷駅周辺地域について周辺の郷に取り込まれたとするならば、多くが小川郷･健田郷に含まれるとみる。

（４）東総周辺の各郡の郷比定

A　武射郡

武射郡の各郷は迩瑳郡石室郷･須加郷･幡間郷など迩瑳郡南部の地域と関わりが深いため、『和名抄』に記載されたすべての郷の比定地をみる。

①巨備（こび）郷

邨岡良弼は山武市松尾町折戸に所在する大宮神社の伝記をとりあげ、折戸周辺を巨備郷としている（邨岡1902)。吉田東吾も同様のことを述べている（吉田1903)。また、かつて存在した山武郡教育界も大宮神社の伝記をとりあげ、大平村周辺を巨備郷としている（山武郡教育界1916)。大平村は現在存在しないが、山武市松尾町広根に大平小学校が存在する。ただし、両者ともやや懐疑的である。あまり強い根拠ではないが、広根から折戸周辺を比定地とする。吉田は「巨備」に「こび」の読みをふっている。なお、匝瑳市平木遺跡から出土した墨書土器のなかに「子備」の文字がある（小久貫1988）が、巨備郷の郷名を表したものとみる。これにより、吉田の読みのふり方が正しいことが明らかとなった。

②加毛（かも）郷

芝山町大里字加茂周辺が比定地である。高谷川上流部と中流左（東）岸を郷域とみる。高谷川源流周辺は下総国埴生郡山方郷に近い。また、東方は長く迩瑳郡茨城郷と接する。南方は狎猥郷と接する。その境は不明瞭であるが、芝山町下吹入あたりと想定する。

③理倉（りくら）郷

芝山町朝倉周辺が比定地である。「朝」と「理」は字そのものや音訓ともに似ておらず、根拠は弱いが、「倉」の字が共通することにより、朝倉周辺を理倉郷とする。高谷川上・中流の右（西）岸および西方に延びる支谷周辺を郷域とみる。木戸川左（東）岸近くで新居郷と接する。

④狎猥（おしくま）郷

横芝光町（旧横芝町）牛熊周辺が比定地である。

⑤長倉（ながくら）郷

横芝光町（旧横芝町）長倉周辺が比定地である。

⑥畦代（あじろ）郷

大きく横芝光町栗山付近に比定する説（吉田1903）と、山武市（旧成東町）成東から湯坂付近に比定する説（邨岡1902）の２説がある。山武市（旧成東町）和田に芦田の小字がある（竹内編1984)。これは後者を支持する材料である。ただし和田は後述する新屋郷に含まれる可能性があり、遺称地は作田川対岸から移ったものかもしれない。なお、武射郡と山辺郡の境は作田川とみられている（天野2009)。成東･湯坂周辺は作田川の南岸であり、山辺郡域の可能性がある。しかし、武射郡の中枢地域である嶋戸･真行寺に近いことから成東･湯坂周辺に限っては武射郡域の可能性が高い。なお、畦代郷はその郷名から低地を多く含む郷である。対象の低地は成東台地の南方･東方にある。ただし、南方は山辺郡武射郷と近くなることから狭く、

それに対して東方は海浜砂堤帯周辺を木戸川近くまで延びる。なお、畔代は「あしろ」の可能性もある。

⑦片野（かたの）郷

山武市（旧松尾町）八田に片野の小字がある。中世において山辺荘片野郷が所在した地域である。

⑧大蔵（おおくら）郷

山武市（旧松尾町）上大蔵･下大蔵周辺が比定地である。

⑨新居（にいい）郷

芝山町新井田周辺が比定地である。新井田(にいだ)の音から「新居」は「にいい」と読むとみる。

⑩新屋（にいや）郷

山武市（旧成東町）新泉（にいのみ）周辺が比定地である（吉田1903)。新泉周辺の北方近くに大蔵郷があるため、比定が妥当であるならば、新屋郷は新泉周辺から西方、境川対岸の和田･板附まで含む東西に長い郷域と想定できる。その一方で視点を他の地域に転じると､山武市（旧山武町）武勝には新山（しんやま）の小字、同下布田には新矢野（しんやの）の小字がある。また、同椎崎には新坂（にいさか）・新坂台の小字がある（竹内編1984)。ただし、武勝･下布田周辺は作田川（成東川）の南西岸地域であり、山辺郡域とみられている地域である（天野2009)。しかし、武勝･下布田は山辺郡北側に位置する管屋郷中心部からかなり遠いため、武射郡の可能性も若干ある。なお、山辺郡禾生郷の比定地は管屋郷に近接する台地上ではなく、九十九里町の海浜砂堤帯周辺であるという萩原恭一氏の説（萩原1988）にしたがう。

以上から本稿では新屋郷について、新泉周辺の可能性がやや高く、武勝･下布田周辺の可能性あるいは武勝のみの可能性が若干あるとする。椎崎周辺は埴屋郷の可能性があるが、断定しがたい。なお、新泉周辺は武射郡家のある嶋戸、郡寺のある真行寺に近く、これらの地域が大蔵郷であるのか、新屋郷であるのかという大きな問題が生じる。

⑪埴屋（はにや）郷

山武市（旧山武町）埴谷周辺が比定地である。

○高舎（たかや）里

芝山町高谷（たかや）周辺が比定地である。遺称地と里名の音が同一である。平城京跡から出土した木簡のなかに「上総国武昌郡高舎里荏油」（表）･「四升八合　和銅六年十月」（裏）というものがあるが、これは高舎里から納められた荏胡麻油の付け札木簡である。高舎里の存在はこの木簡に基づくものであるが、『和名抄』にはみられない。高谷周辺は『和名抄』成立時点では狎猥郷に編入されたとみる。

B　埴生郡

埴生郡は下総国北部中央東寄りに位置する郡である。埴生郡の東方は香取郡、西方は印播郡、南方は武射郡、北方は常陸国である。埴生郡は『和名抄』には、玉作郷・山方郷・麻在郷・酢取郷の順で４郷が記載されている。玉作郷は埴生郡の中央、山方郷は南部、麻在郷は北西部、酢取郷は北東部に位置する。各郷の比定地について一部を記すと、玉作郷は成田市松崎周辺、山方郷は成田市山之作・駒井野周辺、麻在郷は印旛郡栄町麻生・安食付近、酢取郷は成田市羽鳥付近である[3)]。玉作郷と山方郷、麻在郷と酢取郷は各々隣接しているが、山方郷と麻在郷は離れている。したがって、『和名抄』の記載については、玉作郷と山方郷の２郷で１組、同様に麻在郷と酢取郷の２郷で１組とみることができる[4)]。なお、酢取郷について印西市北部をあてる説があるが、筆者は印西市北部を印播郡言美郷に比定しており、その説を採らない[5)]。

埴生郡の郡域は北西部から南東部にかけてやや細長い形状であり、中央の玉作郷で東西の幅が狭くなっている。この郷域の形状が細長いのは、主として北部に存在する埴生評（郡）家の勢力が､南部の山方里（郷）周辺に所在する鉄生産遺跡群の地域を掌握したことによるとみる。その行動の最大の理由は、埴生評（郡）家（前身の時期を含む)、より具体的にいえば大生部直氏が龍角寺の創建にあたって、釘などの建築資材を求めたことにある[6)]。龍角寺尾上遺跡（石戸1991）は大型の鉄釘が多量に出土しているが、尾上遺跡の方形特殊遺構が造営された7世紀第３四半期頃は、現在までの知見では山方里の鉄生産遺跡群は造営されていない。しかし、その造営開始は龍角寺にさかのぼる尾上遺跡の築造が契機になった可能性がある。埴生評(郡)家を経営した勢力が鉄生産遺跡群を掌握したことは、木下別所廃寺の建立など、周辺地域に多大な影響を及ぼした。なお、龍角寺が創建された７世紀後半頃から８世紀前葉は評里制の時期である。山方郷も｢山方里｣のようにいえる時期であるが、里名が不明であるため里の時期を含めて山方郷の鉄生産遺跡群と呼称する[7)]。山方郷に鉄生産遺跡群が営まれた背景として、この地域の多くが旧鬼怒川・香取の海水系と太平洋に注ぐ木戸川や栗山川支流の高谷川の分水界地帯であり、炭の材料となる木材が豊富に存在することをあげる。主原料である砂鉄も東総地域とともに比較的容易に入手で

きた。

C　印播郡東部

印播郡は東総地域の郡とは直接、接していないが、印播郡と迎瑳郡との交通関係があるため、東部地域のみみていく。印播郡東部のやや北側に位置するのは、八代郷であり、成田市八代周辺の地域である。主として北東方で埴生郡玉作郷と接する地域である。八代郷の南方に位置するのは印播郷である。酒々井町上岩橋・尾上周辺から高崎川の中・上流地域に比定できる郷である[8)]。なお、印播郷については、当初、郷（里）域は高崎川の上流地域には及ばなかった可能性があるが、開発の進展に伴い、郷域が拡大したと考える。この考えに対して木原高弘氏は筆者とは異なり、佐倉市長熊周辺から高崎川の中・上流域まで長隈郷としている。また、印播郷については成田市台方・江弁須周辺から江川上流地域としている（木原2019）。しかし、筆者は成田市台方・江弁須周辺を八代郷内とみる。それは木原氏の郷域把握では八代郷が極端に狭域になるからである。この点は木原氏が郷域把握のもととしたとみられる山路氏の考察にもいえることである（山路2014）。郷域についてはほとんどの郷で文献史料がなく、また根拠となる考古資料も乏しいため、遺跡分布や地形、周辺諸郷とのバランスを考慮する必要がある。川尻秋生氏は印旛沼東方・南方の諸郷が、西方の諸郷に比べて狭域であることを指摘している（川尻2009）。その指摘どおりに東・南方の諸郷が全体に狭域であるとしても、成田市八代周辺だけを八代郷とすると周辺の諸郷とのバランスが悪い。筆者はむしろ八代郷の郷域は、富里市久能付近まで延びる可能性があるとみる。なお、木原氏が印播郷内とした成田市大袋に所在する大袋腰巻遺跡や大袋小谷津遺跡について、天野努氏は筆者と同様に八代郷内の可能性が高いとみている（天野2019）。このように、印旛沼東方・南方の諸郷の郷域については、埴生郡玉作郷・山方郷を含めて、検討すべき余地がある。

筆者の見解による印播郷の郷域は当初、高崎川の上流地域には及ばなかった可能性があるが、開発の進展に伴い拡大した。ただし、木原氏による飯積原山遺跡の研究成果等により、房総における初期荘園遺跡の様相が解明されてきており（木原ほか2015、木原2016、木原2019）、郷としてのまとまりがどれほどのものであったかは、今後の検討課題である。

印播郷はその東方で、埴生郡山方郷、上総国武射郡と接する地域である。印播郷・長隈郷の南方に位置するのは余戸郷であり、佐倉市天辺周辺が比定地である。東方で上総国武射郡・山辺郡と接する地域である。

2　各遺跡の郡郷比定

本項では東総三郡における発掘調査された奈良・平安時代の遺跡がどの郡郷に所属するかをみる。なお、鉄生産遺跡など一部に発掘調査がされていないものも含めている。また、時代はさかのぼっても７世紀末くらいまでの時期に限っている。土師器・須恵器等が散布する遺跡で発掘調査が行われていない遺跡については、膨大な数量であることと古墳時代のみの遺跡が存在するとみられることからとりあげていない。

第１表に遺跡と所属郷の比定案を示した。所属郷を一つに確定しがたい場合、「または」の意味で記号の「/」を使用した。ただし、その場合でも先に記述した方を優先的に考えている。

とりあげた遺跡のうち東総地域及び山武郡横芝光町・芝山町・成田市東側地域については（公財）千葉県教育振興財団の図書室に所蔵している報告書をあたった。2019年２・３月に集中的に調べ、その後本稿入稿の時点までに補足に努めたが、なお遺漏があろう。

とりあげた遺跡は数が多いため、引用文献については他項でとりあげたものを除いて省略した。かつて存在した香取郡市文化財センターや東総文化財センター発行のものが多いが、各市町教育委員会発行のものも少なからずある。また、国・千葉県の事業に関わるものでは、千葉県教育振興財団（千葉県文化財センター）および千葉県教育委員会発行のものもある。さらに、成田市については印旛郡市文化財センター発行のものも多い。古い報告書では各々の遺跡調査会発行のものもあり、近年では民間の発掘調査組織によるものもある。

各遺跡については原則として各市町教育委員会が把握しているとみるので、第１表に遺跡所在地の旧市町と現市町を示した。

比定する郷はおおむね『和名抄』に基づくが、山幡郷は墨書土器及び文献史料によって裏付けられたため、消滅の時期の問題はあるが、そのほかの郷と同列扱いとする。荒海駅周辺地域は磯部郷内とみるが、駅家の存在を重視して磯部（荒海）を加えた。なお、真敷駅・荒海駅は延暦二十四年（805）に停止するので、９世紀代以降のみの年代である遺跡については、「真敷」や磯部（荒海）と記述するのは正しくない。９世紀代以降の「真敷郷」は小川郷や健田郷をはじめとする周

第１表　東総三郡における発掘調査実施遺跡等の郡郷比定

郡	郷	所属市町 旧	所属市町 現	遺　跡　名
匝瑳	野田	野栄町	匝瑳市	吉田内
	長尾			
	辛川/大田/海上郡須賀	旭市	旭市	砂子山
	千俣	八日市場市	匝瑳市	大寺　大寺出羽　大寺廃寺　雉子ノ台　長者台　真々塚　御堂跡　御堂廃寺　柳台
		山田町	香取市	萱付道
	山上	光町	横芝光町	神山谷　篠本城跡　城山　夏台　新台　八石田
		八日市場市	匝瑳市	木積台　八辺窯
	幡間	旭市	旭市	
	石室	光町	横芝光町	小川台　芝崎　台駒形　中島　傍示戸　虫生駒形
	匝瑳	八日市場市	匝瑳市	飯倉鈴歌　生尾　城ノ台　新城跡　平台　福岡
	須加	八日市場市	匝瑳市	平木
	大田			坊ノ場
	日部	干潟町	旭市	池尻　桜井釜山台(干潟町桜井)　桜井平　椎木　諏訪山　清和乙　清和乙南二番割２号　道木内　茄子台
	玉作			
	玉作/田部	山田町	香取市	平後台
	田部	栗源町	香取市	猪穴製鉄遺跡　岩部　岩部大関　カナクソ製鉄遺跡　外部台　コジヤ　沢カナクソⅡ　猪穴製鉄遺跡　城郷杉谷原　外部台　台　台ノ内　稲穴製鉄遺跡　ツネヤ　堂前　二階　西田部千田　西田部姫宮　西田部向台根崎(荒北・子サキ）　野馬木戸　八津坂(岩部)　平山台　矢沢古墳群(三角野Ⅰ)　谷津坂
		－	多古町	五十塚
		山田町	香取市	高宮台
		佐原市	香取市	飯土井
	珠浦	干潟町	旭市	猪草野１号・２号製鉄遺跡 後田(製鉄)遺跡　金草製鉄遺跡　行屋製鉄遺跡　長熊１号・２号製鉄遺跡　長津製鉄遺跡　長津台２号　八石田製鉄遺跡　離山瓦窯製鉄遺跡　保保示戸１号・２号製鉄遺跡
		旭市	旭市	妙名
	珠浦/千俣	山田町	香取市	山中
	原	－	多古町	内ノ原　桜宮　四角山　志摩城跡　島ノ間　新城　大太良内　多古台遺跡群№３地点・№８地点・№８地点Ⅱ・№９地点　鶴舞窯跡群　二ノ台　八田
	栗原	八日市場市	匝瑳市	小高
	茨城	－	多古町	井野　飯笹　大塚台　大原　門倉　北の内　巣根　千田台　千田の台　長者屋敷　土持台　林　林小原子台一ツ塚　吹入台　侭田　水戸塚ノ後１号塚・２号塚
	中村	－	多古町	大鯉　鴻の松　信濃台・Ⅱ・Ⅲ　大門脇・Ⅱ　中内原　南借当
海上	大倉	佐原市	香取市	大倉山毛　大倉玉田　大谷　側高西　丁子コバッチ
	城上	小見川町	香取市	内野　木内廃寺　清水堆・清水堆Ⅱ　清水入互窯　袖塚　天神後　戸地内　虫幡佛作　竜谷城跡
	麻続	小見川町	香取市	八本砦跡　山川
	布万	山田町	香取市	日下部Ⅱ　乞食堆　長岡出城跡　長沢　仲仁良Ⅰ・Ⅳ　原宿Ⅱ
		佐原市	香取市	屋敷割
	布万/田部/玉作	山田町	香取市	はらⅣ
	軽部	山田町	香取市	御休場　山ノ下城跡
	神代	－	東庄町	神代夏方　高部宮ノ前　平山堂内
	編玉	小見川町	香取市	貝塚長薙　平良文館址　布野台
		佐原市	香取市	駒込Ⅱ
	小野	－	東庄町	粟野台　青馬新西塚　青馬大明神　青馬広畑　青馬前畑　青馬鷲塚　小座ふちき　粟野かち内　小南三軒家小南下宿　西塚南古墳群　沼闕城址
	小野/神代	－	東庄町	前山土師
	石田	－	銚子市	牛込　新農
	石井	海上町	旭市	岩井番匠山　岩井安町　岩井安町南
	須賀	旭市	旭市	高城跡
	横根			
	横根/石井	飯岡町	旭市	三川倉橋前
	横根/須賀	海上町	旭市	蛇園猪鹿々野
	三前	－	銚子市	大宮戸　大宮戸大新田遺跡第１地点　佐野原　三崎３丁目遺跡第１地点
	三宅			
	三宅/三前	－	銚子市	長塚十二山
	舩木	－	銚子市	椎柴小学校　野尻
	橘川	－	東庄町	今郡カチ内　今郡東ノ台　羽計清水西　谷津長新田
	橘川/石田/小野	－	東庄町	宮本刑部
香取	大槻	小見川町	香取市	織幡カジ山　織幡ササノ倉　織幡妙見堂　九美上製鉄遺跡
		佐原市	香取市	下小野製鉄遺跡　多田木戸脇　多田寺台　多田日向　吉原(多田飛行内)　吉原木戸脇　吉原小林　吉原三王
	大槻/山幡	佐原市	香取市	一夜山　大平
	香取	佐原市	香取市	伊地山　伊地山金杉　伊地山藤之台・藤之台２　大荒久　大根磯花　上宿台Ⅰ　神田台　津宮・津宮芝浦東野　長部山　中山　仁井宿東　馬場　平台　福田藤之沢　牧野大荒久
	香取/大槻	佐原市	香取市	香取新福寺
	小川	佐原市	香取市	阿広台　大戸白幡　大戸通崎　片野カヤバ山　観音新林　観音大門　観音茶ノ木　下男山　関峯崎横穴群玉造上の台　玉造宮作　仏師台　森戸
		大栄町	成田市	水神台Ⅰ　向台　村田居山　村田城跡
	小川/「真敷」	大栄町	成田市	かのへ塚・寺ノ上
	健田	佐原市	香取市	鴇崎貝塚　鴇崎天神台　堀之内
		下総町	成田市	青山内山　青山甚太山　青山富ノ木　青山中峰　小野女台　小野権現原　小野小仲内　小野焼山・焼山Ⅱ鎌部長峯　月輪神社　中里紙敷　中里猿ヶ峯　中里道祖神前　中里西口・台口　中里念仏塚　中里原　中里原ノ台　中里原南　中里曲田上　名木大台　名木毛成台　名木天神台　南城砦跡　名木(鎌部)長峯　名木鎌部廃寺　名木不光町寺　名木的場台遺跡２・３地点　南条砦跡　原南

第１表　つづき

郡	郷	所属市町 旧	所属市町 現	遺　跡　名
香取	健田	－	神崎町	遠台　大平　久保向　後輪ノ内　浅間１号墳　台阿らく　立野西　仲台　羽黒　原山　谷津
		大栄町	成田市	久井崎Ⅱ
	磯部	下総町	成田市	新シ山・柳和田台　裏　大菅並木　大菅林　大菅向台　カネヤキ・カネヤキ台　上敷　菊水城址　地蔵原愛宕原　清水台　城ノ腰　高岡清水　遠々地　名古屋　名古屋アサカ台　名古屋小帝西　名古屋経塚群　名古屋薄立　名古屋花立　名古屋山ノ内　七沢天王山　滑川貝作台　滑川観音台　西大須賀コモ田古墳群　西大須賀七曲　猫作・栗山古墳群　仏具田　柳和田台Ⅱ　四谷内谷津　龍正院　龍正院瓦窯跡
	磯部（荒海）	成田市	成田市	荒海鳥打　飯岡榎入　磯部　江地山　大坂台　大室石上　大室十三塚　大室仲妻　旧久住中南　山谷　芝西霜田　芝向芝　台　土室　根田　幡谷宮谷萱橋　幡谷宮谷第１・第２　間野台　右田
	磯部/健田/「真敷」	成田市	成田市	椎ノ木　地蔵原鳳凰　成井寺ノ下Ⅰ(寺ノ下鳳凰)
	訳草	成田市	成田市	木戸下　桐ヶ崎　小泉仲峯　十余三四本木　関戸　関戸砦跡　取香川低地　十余三円妙寺　長田雉子ヶ原長田土上台　長田舟久保　長田要害　長田和田　西和泉栗山　西和泉栗山台　西和泉和田　野毛平泉台　野毛平植出　野毛平上之内　野毛平木戸下　野毛平高台　野毛平千田ヶ入　野毛平東方　野毛平向山　東和泉栗山台　堀之内　堀ノ内前畑
	山幡のち大倉	小見川町	香取市	境原　地々免　大六天　中ノ台
	山幡のち大倉/城上	小見川町	香取市	御座ノ内　名号戸　古屋敷　増田長峰
	「真敷」	佐原市	香取市	伊能原　庚塚　松木下
		大栄町	成田市	大久保　キサキ　昌福寺　城山Ⅰ　タラカイ・Ⅱ　天神山　稲荷山　中台　本郷山　弥右エ門
		成田市	成田市	猿田　桃ノ木台

辺の各郷に取り込まれた可能性があるが、その比定が難しい。また、取り込まれなかった可能性もあり、その場合は不明とするのが妥当なあり方である。しかし、多くの遺跡で発掘調査範囲が遺跡の一部であることから、未調査範囲に８世紀代の集落を含む可能性がある。本稿の「真敷」は位置的に真敷駅周辺の遺跡という意味で記述し、周辺の各郷や不明の記述は煩雑となるため省略した。

おわりに

本稿の１・２をもとに、東総三郡の各郷の主要集落、郡家、交通関係等について記述する予定であったが、与えられた頁数を超えるため、それらについては別に書くこととする。ここでは本稿の問題点として以下のことを記す。

①匝瑳郡珠浦郷の比定地

先述したように、珠浦郷の比定地については筆者とは異なる見解がある（山路2014）。珠浦郷の比定地が定まらなければ、そこに位置する諸遺跡の所属郷も決まらない。匝瑳郡を検討するうえで、最大の問題点である。

②海上郡橘川郷と石田郷の位置関係

筆者は橘川郷を北西、石田郷をその南東とみるが、その逆とみる見解もある（宮内1994）。筆者の根拠は強いものではないが、逆の見解も確実な根拠によるものとは思えない。これも①同様、基礎の把握であるため問題である。

③「真敷郷」の存在、および存在するとした場合かつて「真敷郷」であったところの９世紀代の様相

「真敷郷」という郷（里）が存在したか、存在した場合，真敷駅停止後の地域のありかたが問題である。周辺諸郷に組み込まれたか、一部は荘園領となったか、「公私共利」の地が広がったか、それらの入り混じった様相か、などの諸点をあげる。

ほかにも各遺跡の所属郷の比定が妥当であるか迷う場合もかなりあった。異論も多々あると思われる。大方のご教示を期待する。

注

1）匝瑳郡・海上郡・香取郡のうち、匝瑳郡と海上郡は平成の市町村合併により消滅したが、広域的な地域のくくりとしては、現在も使われる場合がある。一方、香取郡は神崎町・多古町・東庄町が、現在（2019年度時点）も行政区画として存在する。

2）郷の比定地に関しては、ほかに『千葉県の歴史』（宮原ほか2001）など多くの研究成果がある。

3）主として『下総国の戸籍』における山路直充氏の見解に拠った（山路2014）。ただし、そこでは成田市山口周辺を山方郷としているが、筆者は山口周辺については玉作郷内とみる。

4）『和名抄』では、隣接する２郷が続けて記載される場合が多い。この点は山路氏の研究成果に負うものである（山路2009）。

5）詳細は別稿で記述した（糸川2018・2019）。

6）埴生郡家と鉄生産遺跡群の関係を指摘したのは佐々木義則氏であり（佐々木2012）、本稿の記述は佐々木氏の見解に拠っている。

7）成田市東峰や取香等に所在する鉄生産遺跡群については、これまで山方郷との関係の認識は希薄であった。しかし、東峰や取香は埴生郡山方郷（里）の範囲内であり、山方郷（里）の鉄生産遺跡群として、歴史の中に位置づけることが必要である。

8）印播郷の郷域について、山路直充氏は江川西岸の成田市台

方から飯仲周辺としている（山路2014）が、検討の余地がある。本稿では深く立ち入らないが、少なくとも酒々井町酒々井周辺を中心地の一つとすべきである。その点では、『研究紀要25』（今泉ほか2006）に記載された所見の方が妥当である。

引用・参考文献

赤塚弘美　1995『岩井安町遺跡』（財）東総文化財センター

天野　努　2009「武射郡･山辺郡の郡域と郡家･郡名寺院」『古代房総の地域社会をさぐる(1)　－武射郡・山辺郡を中心として－』房総古代学研究会

天野　努ほか　2012『古代房総の地域社会をさぐる（2）－海上郡・香取郡・匝瑳郡を中心として－』房総古代学研究会

天野　努　2019「下総国印旛地域の郡・郷と集落　－印幡・埴生両郡を中心に－」『2019年古代史サマーセミナー全体会資料　古代の郡と郷をさぐる－下総国印旛の事例を中心に－』

石戸啓夫　1991『龍角寺尾上遺跡･龍角寺谷田川遺跡』（財）印旛郡市文化財センター

糸川道行　2018「下総国印播郡言美郷を考える」『研究連絡誌』第79号（公財）千葉県教育振興財団

糸川道行　2019「鳴神山遺跡出土「馬牛…」墨書土器と舩穂郷」『研究連絡誌』第81号（公財）千葉県教育振興財団

今泉　潔ほか　2006「房総における郡衙遺跡の諸問題－下総国を中心として－」『研究紀要25』（財）千葉県育振興財団

小笠原長和編　1996『日本歴史地名体系第十二巻　千葉県の地名』平凡社

奥田正彦ほか　1992『御座ノ内遺跡』（財）香取郡市文化財センター

小久貫隆史　1988『八日市場市平木遺跡』（財）千葉県文化財センター

川尻秋生　2009「古代房総の国造と在地－印波国造と武射国造を中心に－」『房総と古代王権－東国と文字の世界－』高志書院

木原高弘ほか　2015『酒々井町飯積上台遺跡２・飯積原山遺跡３・柳沢牧墨木戸境野馬土手』（公財）千葉県教育振興財団

木原高弘　2016「酒々井町飯積原山遺跡における初期荘園について」『研究連絡誌』第77号（公財）千葉県教育振興財団

木原高弘　2019「酒々井地区の集落」『2019年古代史サマーセミナー全体会資料　古代の郡と郷をさぐる－下総国印旛の事例を中心に－』

栗田則久ほか　1990『佐原市吉原三王遺跡』（財）千葉県文化財センター

佐々木義則　2012「関東における寺院・官衙の造作と鉄生産－７・８世紀の様相－」『たたら研究　第51号』たたら研究会

山武郡教育界　1916『山武郡郷土誌』（影印版1976崙書房）

篠崎四郎　1981「下総国の分置」『銚子市史』国書刊行会

清宮秀堅　1905『下総国旧事考』

竹内理三編　1962『寧楽遺文』上巻東京堂出版

竹内理三編　1984『角川日本地名大辞典　12千葉県』角川書店

多古町　1985『多古町史（上巻）』多古町

千葉県・名著出版　1975『稿本　千葉縣誌』下巻 初刊は大正８（1919）年

萩原恭一　1988「郷名比定について」『東金市久我台遺跡』（財）千葉県文化財センター

蜂屋孝之　1998『干潟工業団地埋蔵文化財調査報告書－干潟町諏訪山遺跡･十二殿遺跡･茄子台遺跡･桜井平遺跡－』（財）千葉県文化財センター

原田亨二　1993「「下総国釘托郡少幡郷」についての覚え書き－古屋敷遺跡出土墨書「山幡」をめぐって－」『調査研究報告』第５号 千葉県立大利根博物館

樋口誠太郎　1986「自然編　町の地形　河川」『山田町史』山田町

平野　功　1992「地名考（1）」『香取通信』第302号 香取歴史教育者協議会

平野　功　1994「古代の地名を考える－小見川町古屋敷遺跡出土の墨書土器を中心として」『香取民衆史』7 香取歴史教育者協議会

道澤　明　2010「聖武天皇に献上された麻布」『図説　香取・海匝の歴史』郷土出版社

宮内勝巳　1994『新農遺跡』（財）東総文化財センター

宮原武夫ほか　2001「古代房総三国の郡・郷里の変遷と比定地一覧」『千葉県の歴史』　通史編　古代２　千葉県

村山好文･鬼澤昭夫　1996『名号戸遺跡』（財）香取郡市文化財センター

村山好文･鬼澤昭夫　1999『古屋敷遺跡』（財）香取郡市文化財センター

邨岡良弼　1902『日本地理志料』1966年臨川書店再刊

山路直充　2009「寺の成立とその背景」『房総と古代王権－東国と文字の世界－』高志書院

山路直充　2014「下総国の郡・郷・里・駅家」『市川市史編さん事業調査報告書　下総国戸籍　遺跡編』市川市文化国際部文化振興課

山路直充ほか　2014『市川市史編さん事業調査報告書　下総国戸籍　遺跡編』市川市文化国際部文化振興課

吉田東伍　1903『増補　大日本地名辞書　第六巻　坂東』冨山房（三版1976）